〔研究ノート〕

Отрадное（オトラードノエ）奇譚

国　松　夏　紀

気がかりな「土地の名」がいくつか，記憶の時空間になお揺曳する。上記引用語句の出典，プルースト『失われた時を求めて』（手元に旧「共同訳」[1]，井上究一郎訳[2]も，また唯一ようやく通読し得た鈴木道彦訳[3]もなくて，刊行中の吉川一義訳)[4]を参照すると，そもそも「コンブレー」は架空の町，その通りの名，近郊（「スワン家のほう」も含めて）も架空の地名とのことのようである。そうすると「ゲルマント」はどうなのか？「ソドムとゴモラ」はそもそも地名と言えるのかどうか？「失われた時」がフィレンツェに見出されるに至るまで「土地の名」への興味は尽きない。物語の「現実」において，架空の地名と現実の地名との差異はどのようなものか？　とりわけ読者にとっての異国を舞台とする作品においては。またこの作品の後半で盛んに取り上げられるドストエフスキーの『罪と罰』のように，ペテルブルクという現実の都会を「虚構化」する場合はどういうことになるのか？[5]　ここでは，取り敢えずそのような問題は脇に置き，もう一方の側からは，読者＝筆者個人にとっての気がかりな「土地の名」に関して。

それを一般的に述べれば，出生地，生育地，長年暮らした今は失われた家屋敷とその周辺，自然環境や四季のめぐりをも含めた「土地の名」が記

キーワード：Отрадное（オトラードノエ），デカブリスト，『戦争と平和』，『白痴』，『悪霊』

憶の時空間において，折りにふれて明滅し，或いは自己主張し，或いは他のことどもの影に隠れたりする。

このような一方は虚構，他方は現実の気がかりな「土地の名」のほぼ中間に位置するロシアの地名 Отрадное（オトラードノエ）について論述するのが，本稿の意図である。そもそも Отрадное（オトラードノエ）とは，ロシアの何処にあるのか？　それが問題だ。

話の発端は，阪神淡路大震災の翌年，1996年の「モスクワ事件」である。「事件」後も予定通りモスクワに留まり6月半ば，これも予定通りペテルブルクに移り2ヵ月滞在。キエフ，イスタンブール，アテネ経由で9月末帰国。その2ヵ月ほど後に書いた文章から引用する。

> モスクワ事件　四月末日深夜，寄宿先集合住宅エレベーター内で三人組の強盗に襲われ，金品を奪われる。前頭部と鼻柱に負傷。眼鏡のレンズに深い傷。上着の裏地を破り取られる。被害額は，各種現金・T/C 合計一千三百ドルほど。都心でドストエフスキー原作の芝居『悪霊』を観て，そこで偶然出会った旧知のK氏とヴォトカを一杯飲んで，地下鉄で帰って来たところであった[6]。

現場は，モスクワ北方デカブリスト通り Улица Декабристов，最寄り駅は地下鉄9号線，環状地下鉄を南北に縦貫する路線の終点の二駅手前 Отрадное（オトラードノエ）である。ちなみに，デカブリストとは概ねナポレオン軍を追撃してパリを占領し帰国後，1825年の蜂起に関与した一群の貴族青年将校である。モスクワの「通りの名」辞典は枚挙に暇がないのであろうが，偶々手元にある一冊から引用してみよう。

> 貴族の革命家の秘密結社（福祉同盟，南方結社）への参加者で，

1825年12月25日，サンクト・ペテルブルクの元老院広場に姿を見せた面々を記念して名付けられた。有罪判決を受けた126名のデカブリストたちのうち80名はモスクワで生まれモスクワで暮らした（Ｐ．Ｉ．ペステリ，Ｓ．Ｇ．ヴォルコンスキー，Ｎ．Ｍ．ムラヴィヨフその他）[7]。

命名は1975年と古くはない。また年号を差し引きすると，蜂起150年記念ということのようだ。名前が挙げられている 3 名が特にこの通りに居住していたというようなことでもなさそうである。一方，地下鉄駅名の由来は至極あっさりしていて，周辺の高層集合団地群の地区（микрорайон）名に拠る[8]。それにもかかわらず，この駅名にデカブリストとその妻たち，とりわけシベリア流刑の夫たちと運命を共にした彼女たちのイメージが固着した。自らの「受難」に引き寄せ重ね合わせたという意識はまったく無く，偶々朝夕見慣れていた（筈の）天井からぶら下がるパネルの印象がそうさせたのである。そうさせるだけ，駅名 Отрадное（オトラードノエ）という言葉の意味に無頓着であったとも言える。そこで改めて取り敢えず手近の露和辞典でこの，もとは形容詞の意味を確かめておくことにしよう。

【岩波ロシア語辞典】（記載の一部省略）
отрада 1 慰安，喜び，楽しみ　2 喜びを与える人・もの
отрадно 1 喜んで，2 楽しい，うれしい
отрадный 喜ばしい，うれしい（отрадное は，この形容詞の中性形）

【研究社露和辞典】（記載の一部省略）
отрада 1 楽しみ, 慰み，喜び，満足（удовольствие）: искать себе *отраду* в чём ... に慰めを求める．2 満足［楽しみを］与える人・もの

отрадно 喜んで，満足げに　――無人述　＜にとって＞楽しい，愉快だ：мне *отрадно* в чистом поле. 空気のきれいな野原に出ると私は心がうきうきする．／*Отрадно* отметить, что … と申し上げることは喜びにたえない.

отрадный 喜ばしい，うれしい（радостный）: *отрадное* известие［впечатление］うれしい便り［愉快な印象］　*отрадное* чувство うれしい気持ち

これらの記述はそう判明したとて，緊急帰国まで考慮した事件当時の気分には勿論，それを書き付ける予定通りの帰国後二カ月の気分にもそぐわないのであるが，それとは別に，Отрадное 駅の半円穹窿天井からぶら下がっていたパネルは，「デカブリストと妻たち」ではないのではないか？という自らの記憶に対する疑念が生じてきた。

そのきっかけとなった原卓也訳トルストイ『戦争と平和』の関連する一節を引用する。1805年，アンドレイ・ボルコンスキーは，アウステルリッツの仏・墺露三帝会戦で重傷を負うも生還，その後，妻を亡くし独り身。

リャザンの領地の後見上の用事で，アンドレイ公爵は郡の貴族会長に会わなければならなかった。貴族会長はイリヤ・アンドレーヴィチ・ロストフ伯爵だったので，アンドレイ公爵は五月の半ばに彼を訪れた。

すでに春の暑い時期だった。森はすっかり装いをこらし，埃がたち，水のわきを通ると一泳ぎしたくなるほどの暑さだった。

アンドレイ公爵は，この用件に関して貴族会長に何と何をたずねなければならぬかという思いが心にかかり，心楽しまぬまま，オトラードノエ村にあるロストフ家の別荘をさして，庭園の並木道に馬車を進めていった。右手の木立のかげから楽しそうな女の叫び声が聞こえ，

馬車の前を突っ切って走りすぎる少女たちの群れが目に入った。（第二部第三篇二）[9]

紆余曲折を経て結ばれそうになりながら，結局死別することになるアンドレイとナターシャ・ロストワとの悲劇，その最初の出会いである。今引用しつつ，このオトラードノエを現代の地下鉄駅名ないしその近辺の地区と結びつけるのは如何にも地理的に無理があるように思える。現代ロシア中央地域のリャザン州，その州都リャザンはモスクワ南東 196 km 地点。広大なロシアからすれば無理ではない距離とも言えようか。しかしその一方で最近の藤沼貴訳トルストイ『戦争と平和』に次のように人物紹介がされているのを見ると，当時の「田舎の領地」で何とか行けるかなとも思うのである。

主要人物紹介　ロストフ伯爵　善良だが意志薄弱な地主貴族。冬はモスクワ，夏は田舎の領地オトラードノエに住む。家計が逼迫しているのに，生活の楽しみを切り詰めることができない[10]。

作品冒頭，ロストフ伯爵夫人と末娘ナターシャの「名の日の祝い」が行われているのがポヴァルスカヤ通り[11]にあるモスクワ中に知られた大きな屋敷であり，夏を過ごすのがオトラードノエ村。ということで，駅天井のパネル画は『戦争と平和』のイメージと決め込んでしまった。「デカブリストとその妻たち」は記憶違いとした訳である。

地下鉄駅名とその天井からぶら下がっているパネルを巡る堂々めぐり，それらは「デガブリスト」に由来するのか，それとも『戦争と平和』もしくは1812年の「祖国戦争」，ナポレオンのモスクワ侵攻に由来するのかの疑問は，註8）に挙げた文献『七つの丘の下に―モスクワ地下鉄の過去と

未来』によってほぼ解決を得た。ところが不十分な点があり，それが充足されたのは最近，「ウィキペディア」地下鉄駅名 Отрадное の項目に付属掲載された写真映像による。実は天井から吊り下げられたパネルは二枚あった。この点からして1996年の記憶が如何に当てにならないか判るのだが，それはともかく，その絵に関して『七つの丘の下に』の解説は詳しくても，図版は手前の1枚と遥か遠方に小さく1枚見えるだけで絵柄は判然としない。それが「ウィキペディア」でパネル2枚の両面，つまり4枚の絵柄が全て明らかになったのである。これを踏まえて「解説」を併せて祖述しておこう。『戦争と平和』も全く外していたわけではないということになる。

地下鉄駅南北の端近く，半円穹窿をなす丸天井から卵型と言うべきか或いは樹木の葉状のパネルが2枚下がりそれらの両面に図像が描かれている（画家は，Ｉ.Ｂ.ニコラエフとＬ.アンネンコワ）。

北側パネルの向こう側（ホーム）の端に向かって。1812年祖国戦争時代のロシアの擲弾兵たちの攻撃隊形が，将軍を中心に描かれている。これは，ボロジノの戦いでのＭ.Ａ.ミロラドヴィチ将軍の有名な攻撃と思われる。（この面は『七つの丘の下に』の図版では全く見えない）その推測の根拠は，その反対側の面にデカブリスト群像の中心として将軍を殺したＰ.カホフスキーが描かれているからである。

カホフスキーは，華やかな軍服姿の同志たちの中にあって地味な文官フロックコート姿で目立ち，また拳銃を正面に構えていることで知られる，とあるのだが，残念ながら「ウィキペディア」の図像もそこまでは判然としない。

このカホフスキーを含むデカブリストたちと向かい合う形のホーム南側のパネルが彼らの妻たち所謂「デカブリストの妻たち」の図像である。これはわびしい冬のシベリアの風景（教会？正教十字架の墓標

が見える）の上に女性たちだけの群像で比較的明るい色調であり，おそらくこれが最も記憶に残っていたものと思われる。『七つの丘の下に』の図版はこれが見えず，その裏側の男たちだけの群像が写っている。南階段に面したこの画面にはロシア文学の巨匠たち，司祭長アヴァクームからレフ・トルストイとフョードル・ドストエフスキーまでが描かれている。（この画面は全く記憶にない）

1812年「祖国戦争」，デカブリストの誕生とその1825年の反乱，その後の作家・思想家と文脈は明らかだが，それ故にかえって駅名 Отрадное との関連性は不明瞭になる。そんな中，トルストイからドストエフスキーに視点を変えて，こちらが Отрадное の本家本元ではないかという転機が訪れた。示唆は，「事件」後Ｋ氏に誘われた参加したペテルブルク及びスターラヤ・ルッサで開催されたドストエフスキーの研究会におけるＫＳ氏の『白痴』をめぐる発表であった。発表を伺いながら当初はエパンチン将軍家の別荘があるパーヴロフスクと混同していたのだが，その後作品を読み直したりしているうちに（詳細は割愛する）次第に Отрадное の実体（？）が明らかとなった。それはヒロイン，ナスターシャ・フィリッポヴナの「屈辱」に深く関わる「土地の名」であった。

＊

『白痴』の物語が始まった時点，つまり主人公ムィシュキン公爵が療養先のスイスから久しぶりに帰国，ワルシャワからの列車内で宿命の恋敵ロゴージンと出会う時から18年前，７歳のナスターシャはみなし子となる（火災で母親焼死，父親狂死，妹病死）。近隣の地主トーツキーの保護下におかれる。５年後，トーツキーは，12歳になったナスターシャに目をつ

け専門の家庭教師をつけて高度な「淑女教育」を施す。４ヵ年の教育期間終了後，トーツキーは16歳になったナスターシャを自分の領地の小村に連れて行く。その小村の名こそが Отрадное（オトラードノエ）であった。

この新居に移って２週間後にトーツキーはやって来て，それ以来毎年夏に二月か三月滞在することが恒例となり，４年経過。ナスターシャは20歳になる。そんなある年の７月，恒例の夏の滞在をわずか２週間で切り上げ，４ヵ月後の冬の頃，トーツキー結婚の噂にナスターシャ決然とオトラードノエ村の家を捨て首都ペテルブルクに上る。

ナスターシャはこの屈辱の４年間で別人のように変貌している。美しい少女からエキセントリックな大人の美女に変身している。トーツキーは最も身近に居ながらそれに気付かなかった自身の迂闊さを恥じ，結婚を断念する。それからさらに５年経過の現時点，55歳のトーツキーとエパンチン家の長女アレクサンドラ（25歳）との縁談が持ち上がる。ナスターシャは再び（？）邪魔者となり復讐心に点火，物語が動き始める。

以下，参考までに該当部分の日本語訳を借用提示しておく。

> 家はたいそう優雅にしつらえられており，村そのものも，まるであつらえたように愉楽村（オトラドノエ）と呼ばれていた[12]。

これは文字通り故意に名付けられたものである。作者ドストエフスキーによる虚構と考えてまず間違いないであろうが，虚構故にかえって『白痴』という文学作品の中ではナスターシャ・フィリッポヴナの「屈辱」の源泉としての重篤のリアリティを獲得している。現実の小村はその名とともに儚く消滅しがちなものであるのに反して。

しかし，その一方において Отрадное は，モスクワ地下鉄駅名（その典拠の地区名）以外に現実的典拠，「土地の名」を持たないのだろうか？との

疑問に導かれるように（大した期待もせずに），手元のロシア連邦地図[13]を参照する。巻末索引で検索し本図で確認したところ，なんと Отрадное という町はロシア中に10を数える（同名のラドガ湖東岸の小さな湖は除く）。ちなみにそれらを以下に列挙する。

○アルタイ地方，ノボクズネツク西側付近のオトラードノエ。
○カリーニングラード州のオトラードノエ。
○レニングラード州，ネヴァ河沿岸の町オトラードノエ。
○フィンランドとの国境付近のヴィボルクと入江を挟んで向い合うオトラードノエ。
○ラドガ湖西岸上記オトラドーノエ湖に面する町オトラードノエ。
○モスクワ州クレムリン北方のオトラードノエ。
○同じくクリムリン北方のオトラードノエ（ここに同名の地下鉄９号線の駅がある）。
○沿海州ウラジオストク北方，ハンカ湖付近のオトラードノエ。
○ヴォルガ川上流，トヴェーリ付近のオトラードノエ。
○沿海州，ハバロフスク南方のオトラードノエ。

『白痴』のオトラードノエ村に収束したかに見えてこれではオトラードノエが，徒にとりとめもなく拡散したかに思われる。ところが，これでもまだましな方であることが，ネット検索を試みると判ってくる。Отрадное から検索条件を сельцо Отрадное に拡大するとヒット数も手におえないほど拡大する。

＊

何かおかしい。何か違うアプローチの方法がありそうだ。その感触は，

例えば，プルースト『失われた時をもとめて』第4篇「ソドムとゴモラ」に触発されて何故か Золотой Вавилон（黄金のバビロン）というショッピングモールの名称に思い至った。漠然とした「黄金の楽園」もしくは「永遠の廃都」といった連想によるものだろう。偶々地下鉄駅 Отрадное をモスクワの詳細な地図[14]で確認していたところ，駅名にかぶるように「黄金のバビロン」が記載されているのに気がつき，不思議な感じがした。1996年の「事件」当時，このショッピングモールは無かった筈だ。2010年暮れ「黄金のバビロン」には見物に出かけているが，その時「事件」現場の記憶がよみがえらないということがあるだろうか？

この疑惑は，2010年当時モスクワで使っていた地図[15]と書店注文で入荷した最新の地図[16]を照合することで解決した。デカブリスト通りの「黄金のバビロン」は2010年以降の開設でその当時はまだ地下鉄8号線「植物園」駅付近の Золотой Вавилон しかなかったのである。それにしても両者はそう遠くはない。そうと知っていたら，わざわざ出かけたりしなかったかも知れない。いずれにしても Отрадное に関してもこの手の初歩的な思い違い，思い込みが何処かで働いてはしまいか。

註

1）新潮社版『失われた時を求めて』全7巻（淀野隆三，井上究一郎，伊吹武彦，生島遼一，市原豊太，中村真一郎訳）1974年5月初版，1991年1月16刷。＊1959-60年新潮文庫版全13冊の再刊。

2）筑摩書房ちくま文庫版『失われた時を求めて』全10巻（井上究一郎個人訳）1992年2月－1993年7月。

3）集英社版『失われた時を求めて』全13巻（鈴木道彦個人訳）1996年9月－2001年3月。

4）岩波文庫版『失われた時を求めて』全14冊（吉川一義個人訳）2010年11月－2015年5月（第8冊）。

5）例えば，ペテルブルクのドストエフスキー博物館で購入した «Прогулка

Достоевского» 添付の DVD を視聴し，同じく添付の地図を頼りにラスコーリニコフの屋根裏部屋のある建物，ソーニャの仕事場，金貸しアリョーナの住居と辿り彷徨えば，虚実皮膜の間，奇妙な眩惑感覚に襲われるだろう。

6）国松夏紀「ラーゲリのことその他――ロシア研修の旅から」桃山学院大学広報「アンデレクロス」第78号，1997年 1 月 pp. 20-22

7）Имена московских улиц: Топонимический словарь.－М.: ОГИ. 2007.－608с.: ил.－（Московская библиотека）

8）Наумов М. С. Под семью холмами: Прошлое и настоящее московского метро. － М.: АНО ИЦ Москвоведение»; ОАО «Московские учебники», 2010.－448с.: ил. ちなみに本書のメインタイトル「七つの丘の下に」は，言うまでもなく「七つの丘の上に」建都されたローマの伝承が踏まえられさらに「モスクワ第三のローマ説」も踏まえられている。「第四のローマ」はなかるべし。ビザンチンのコンスタンティのポリスに次ぐ第 3 のローマ＝モスクワもまた七つの丘の上に建設されたが，地上の都に匹敵する地下宮殿として地下鉄網が掘削造営された云々。

9）中央公論社版新集世界の文学⑱トルストイ『戦争と平和Ⅱ』（原卓也訳）1968年 6 月。pp. 7-8「アンドレイ公爵は」以下の原文は次の通り。テキストはトルストイ生誕100年記念90巻全集（1928-1958）のリプリント版（1992）桃山学院大学図書館所蔵である。

Князь Андрей, невеселый и озабоченный соображениями о том, что ему нужно о делах спросить у предводителя, подъезжал по алее сада к отрадненскому дому Ростовых. Вправо из за деревьева он услыхал женский, веселый крик, и увидал бегущую на перерез его коляски толпу девушек.

10）岩波文庫版トルストイ『戦争と平和（一）』（藤沼貴訳）2006年 1 月, p. 7

11）ちなみに，ポヴァルスカヤ通り Улица Поварская は，クレムリンの北西，新アルバート通りの北側，両通りがその西端で交差する付近にゴーゴリ博物館，すなわちゴーゴリ終焉の地がある。

12）河出文庫版（望月哲男訳）『白痴 1 』2010年 7 月刊，p. 84（第 1 部－4）ちなみに30巻全集⑧35-36 の原文テキストは以下の通り。

убран он（дом）был особено изящно, да и деревенька, как нарочно, называлась сельцо Отрадное.

さらにちなみに，原文テキストは異なると思われる翻訳例を 2，3 提示しておく。

米川正夫訳（河出書房版個人訳全集⑦1969年 6 月㉁，1978年 6 月⑭刷刊 p. 43）

≪その家はかくべつ優美に飾られており，村の名もまるでわざと付けたように慰楽村（オトラードノエ）と呼ばれていた。≫

小沼文彦訳（筑摩書房版個人訳全集⑦1963年 4 月㉁，1971年 4 月⑩刷刊，p. 42）

≪その家はとりわけすっきりと優美に飾られていた。それにその小さな村はその名も，まるでわざとつけられたもののように「慰め（オトラードノエ）」村というのであった。≫

木村浩訳（新潮社版全集⑨1978年 8 月刊，p. 52）

≪その家はとりわけしゃれた飾りつけがしてあった。それに，この小さな村はまるでわざとそう名づけたもののように「慰めの村（セリヴォー・オトラードノエ）」と呼ばれていた。≫

13）ГЕОГРАФИЧЕСКИЙ АТЛАС РОССИИ. М., 1997. Производственное картосотовительское объединение»КАРТОГРАФИЯ»

14）Самая БОЛЬШАЯ МОСКВА. АТЛАС С ТОЧНОСТЬЮ ДО ДОМА.（最も大きなモスクワ。1 戸に至るまでの詳細地図）

15）АТЛАС МОСКВА. С КАЖДЫМ ДОМОМ.（モスクワ地図。一軒一軒に至るまで）

16）14）に同じ。